

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2022.12



令和4年12月1日発行(毎月1回1日発行)第70巻第12号 No.775

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しました北上した、すべての未開なものと同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ氣持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地 中 海

一〇二年十二月号（通巻七七五号）

送風塔

秋山真理子
大浪美雪
44

◇今月の二十首詠……三年ぶり

安部 律 2

■作品[A]

中島央子・永塚節子他 4

中川富美子他 20

■歌壇月旦
九十七歳の現役

高尾恭子
64

■十月号作品批評

66

■オリーブ集

箕浦 効・若林美知恵他 38

A.....菊地栄子・梅本武義
田中富子・石塚貴美恵

◇今月の二人

大堀貞子・野本礼子 16

B.....山野幸司・色井静代
C.....西堤啓子

香川進の生きものの歌 50

田土成彦 15

オリーブ集.....三浦好博

私と短歌との出会い (244)

平尾はるみ 19

久我田鶴子
〔編集部〕 18

今月の二人・作品評

最近の歌誌より

〔編集部〕 65

神田通信.....表3

● 追悼・本田良一 ●

本田良一作品十三首選

追悼文

〔編集部〕
吉永惟昭

(表紙デザイン) 神田通信

作品 A

中島央子

夏の終り

・森

夕あかね背にシルエットのスカイツリー 夏の終りの尖塔ひかる
終息と収束の遅ひたしかめる夏の驟雨をひとり聴いて
地の星のことくに白し玉簾 秋発つことぶれ足下にあり
身のためと登る坂 徒々暮の散歩に老いの息づき余る
昼となく夜となく救急のサイレンに振動不足（ハナ）の共鳴
東京湾とりまく高層ビルの群 令和のざわめく夕陽に染まる
手のひらの運命線を眺めつつ頑張りもせず諦めもせず

永塚節子

白波

・銀

七日ほど遅れて咲ける節分草こよなく愛でる主待ちおり
道の辺におおいぬのふぐりほとけのざ色見え初むる春となりけり
おりふしに互みを文えいくとせか共に来た道 一人行く道
もやもやと続く梅雨空くちなしの際立つ白にふむ哀しみ
新盆の庭に咲きつぐゆうすげの黄の色さみし澄みとおるゆえ
ゆうすげの咲くを待ちいし夕つ方時は帰らず人は帰らず
さえぎるもの一つだに無き海原を白き釣り船立つる白波

仲西正子

白桃

・沖

忍び込むオミクロン株におろおろす守れ十日は息潜めよと
粒ぞろい笑みて並べる川中島白桃の香よ 祀を秘めて
感染より四日目となり直立の白桃食めば快氣を覺ゆ
嗅覚も戻りてきたり白桃の香り丸ごと喉におとす
賜りし刺抜き地蔵の守り札まず懐に入れむ温もり
あら尊刺抜き地蔵の札えたり先ずは疫病の過ぎるを待たな
八歳と五歳の箱の置きみやげ小さき貝と蟬の脱け殻

萩葉子

柚子

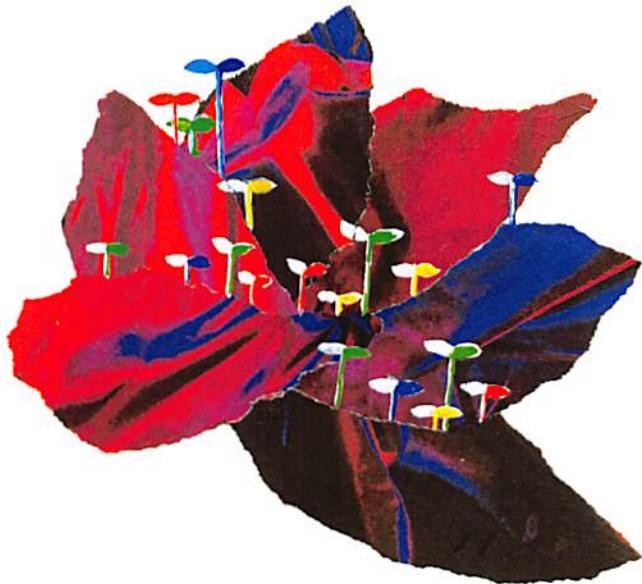
・銀

オールドバカラ展手にもちて「香水瓶のM」
娘がひとつ買いきし柚子に温まる手持ちの柚子は後日にまわし
せりなずな七草がゆを大鍋を作りて家族の健康祈る
鍼灸にひとりで参る母の忌に母はいっさに石段のぼりたり
街道のあの日のあの時語りつきあつという間に別れのときが
ネモフィラがいちめんに咲くカレンダー誕生月はさみどり五月
祖父の家の黒光りする引き戸前帰るときいつも祖父に呼ばれて

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2022.12



令和4年12月1日発行(毎月1回1日発行)第70巻第12号 No.775

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の癡惱として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しました北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みんなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地 中 海

一〇二三年 十二月号 (通巻七七五号)

◇冬のアンソロジー 〈この世のほかの世を知らず〉 永田進一

秋山真理子 44

大浪美雪 45

■遊覧寄港 〈瀬戸内とびしま海道〉

安部 律 2

◇今月の二十首詠 …… 三年ぶり

中島央子・永塚節子他

中川富美子他 20 4

■作品[A]

■歌壇月旦

64 46

九十七歳の現役

高尾恭子

66

■十月号作品批評

A……菊地栄子・梅本武義

66

B……田中富子・石塚貴美恵

66

C……山野幸司・色井静代

66

■オリーブ集

オリーブ集……三浦好博

66

◇今月の二人

大堀貞子・野本礼子

16

久我田鶴子

66

香川進の生きものの歌 50

出土成彦 15

平尾はるみ

19

久我田鶴子

66

私と短歌との出会い (244)

今月の二人・作品評

久我田鶴子

66

最近の歌誌より

（編集部）

65

（編集部）

65

● 追悼・本田良一 ●

本田良一 作品十三首選

【編集部】

神田通信……表3

追悼文

吉永惟昭

三年ぶり

安部 律

一九五一年生まれ。
鷺の会に所属。
歌集に『四月の霧』がある。

夏の陽をあつめて運ぶ最上川三年ぶりの心うるおす

最上川滝の白糸しぶきつつ山のまゆより落ちてくるなり
滝に対き黙してしばし動かざり水の力に打たるるごとく

ようやくに訪いし古里七月の庄内平野は瑞穂のみどり
遙かには鳥海山のシルエット水色淡く透けるがごとし

古里のまほらと仰ぐ鳥海山友らと登りし十代はるか

山開きのニュースを聞けば蘇る雪を溶かししカレー作りを
病みしより十七年の弟よ奇跡を生きてようよう歩く

突然のくも膜下出血おとうとの仕事と夢を奪い去りたり

人格の激しき変貌に惑いつつ支えくれにし家族の歳月

運命と息子の病を諾いし亡父の晩年今なお悲し

墓参りともになしたる弟は父母の享年をくりかえし聞く

古里の小さな漁港に降り立ちて海の匂いを全身に浴ぶ

父母に守られていし日々なりき頬を撫でゆく潮風やさし

生家ちかく海辺に遊ぶ母と子に夢のようなる杳き日の顕つ

幼き日あんな所にと見上げし花よ切り岸に咲く白き山百合

麻痺を負い生きる外なき弟か知らずに逝きし母の夢みる

高校の修学旅行にあがないし舞扇今も身のうちに棲む

暑すぎる夏が呼び込む大雨か最上川氾濫ニユースに釘づけ

山の端をオレンジ色に染めながら暮れてゆくなり光を曳きて

作品

A

中 島 央 子

夏の終り

・森

夕あかね背にシルエットのスカイツリー夏の終りの尖塔ひかる
終息と収束の遅ひたしかめる夏の驟雨をひとり聴いて
地の星のことくに白し玉巖 秋発つことぶれ足下にあり
身のためと登る坂従夕暮の散歩に老いの息づき余る
星となく夜となく救急のサイレンに振動不足（ハナ）の共鳴
東京湾とりまく高層ビルの群令和のざわめく夕陽に染まる
手のひらの運命線を眺めつつ頑張りもせず諂ひもせず

永 塚 節 子

白 波

・銀

七日ほど遅れて咲ける節分草こよなく愛でる主待ちおり
道の辺におおいぬのふぐりぼとけのさ色見え初むる春となりけり
おりふしに互みを支えいくとせか共に来た道 一人行く道
もやもやと続く梅雨空くちなしの際立つ白にふふむ哀しみ
新盆の庭に咲きつぐゆうすげの黄の色さみし澄みとおるゆえ
ゆうすげの咲くを待ついし夕つ方時は帰らず人は帰らず
さえぎるもの一つだに無き海原を白き釣り船立つる白波

仲 西 正 子 白 桃

・浦

忍び込むオミクロン株におろおろす守れ十日は息潜めよと
粒ぞろい笑みて並べる川中島白桃の香よ祓を秘めて
感染より四日目となり産直の白桃食めば快氣を覚ゆ
嗅覚も戻りてきたり白桃の香り丸ごと喉におとす
賜りし刺抜き地蔵の守り札まず懐に入れる温もり
あら尊刺抜き地蔵の札えたり先ずは疫病の過ぎるを待たな
八歳と五歳の箱の置きみやげ小さき貝と蝶の脱け殻

萩 葉 子 柚 子

・銀

オールドバカラ展手にもちて「香水瓶のM」
娘がひとつ買いきし柚子に温まる手持ちの柚子は後日にまわし
せりなずな七草がゆを大鍋に作りて家族の健康祈る
鎌倉にひとりで参る母の忌に母はいっさに石段のぼりたり
街道のあの日あの時語りつきあつという間に別れのときが
ネモフィラがいちめんに咲くカレンダー誕生日はさみどり五月
祖父の家の黒光りする引き戸前帰るときいつも祖父に呼ばれて

白子れい

朝の小径

・洛

浜本芙美

辻樓

・夢

塞かれいし疏水に水の流れ初む音なく静かにされど豊かに太陽のいまだ出でざる五時すぎの空仰ぎつつ御寺にむかう流れいる疏水に小鳥の姿なし一羽小鳥の水辺に行む蟬の声かぼそくなりてわが歩み引きとめらるる疏水のほとり丈高く伸びし向日葵われの丈越えて咲きおり朝の小径に子をもたぬ吾の遺産はどうなる時々思うもつそのままに朝の五時いであう人の少なくてマスクはずして大きく息吸う

ぱぱりょうこ

ゆきつもどりつ

・鹿

五円玉手よりのがれてまろびたりコンビニの床に自由満喫キャッシュレスの時代となりコインたちサイフにこもり身をせばめいたるや昇りくる月を待ちつゝ氣もそぞろ天窓の下をゆきつもどりつ天窓に十五夜の月びったりと嵌まりくれたる十三時五分わが家の中より満月を仰ぎつつ神の思召しと沁みておもえり植えし覚え無きさ庭に瑠璃色の小花咲きみつ或る日気がつく名を問えば露草とう病む身には魂しずめの汝ら集団

浜谷久子

生まれきて

・地

生まれきて赤兎は大きき口を開け新生の息をひたすらに吸う見知らぬ地男の子三人それぞのスタート四人の祖父母が見守る置き土産はマスク切り爪靴下の片っぽ洗濯物の山ほど

午後雨の予報も今朝の日の光洗濯物に吸わせてしまおう

散りいそぐ白木蓮の花びらを通りすがりの兎が拾いやくひとすじの月の光に逃げる脚百足を踏んで刺されて一瞬

ささやかな予定の幾つかこなす日日夕暮ればただ汐引くように

水滴りに白く映りし雲の上虫が一匹泳きておりぬ景子さん今日は来ぬかと独り言さして特別の用はないけれどよきニュース一つもあらぬと思いつつそれでも世界の映像みている少女の日そこを通れば石のつぶて飛びくる地区のありしを思うルンルン何度か言えば何時しらに心の先に灯りがともる失うもの少なくなりつつ年重ぬこれでいいのだ辻樓のあう塩田跡地ティゴの花の紫が風にゆれる夢よりさめぬ

檜垣美保子

夏雲

・昂

油蟬鳴く日盛りは耐えがたくなかな溶けぬ塩飴を噛む蟬の声ふいに止むとき入れかわるおかえりなさい左の耳鳴り高きより低きへ流れ溜まりたる路肩の砂に根を張る露草わきあがる夏雲の峰をめざしたき衝動のあり自転車をこぐ七時間のちの未来がくることを前提にロールキャベツ煮ている住む人は知らねどいつもの西向きの窓九階に日の名残りあり六階の空に双手を差し入れて闇引きおろさんとするときかけ

福田庸子

柏道

・今

小さき音あげてくだれる沢水のしづかにしみて人去りし村草猛る柏道のなか秋陽浴ぶ曙草の点すぬくみよ

杉檜暗く繁れる枝伸びて遠くさびしく鹿の啼く森春呼ぶと聞く花弁のましろさを常に愛でにし人を忘れず

子供らはどこに生くるや爆撃に焼き尽くされし街跡広き人間のおろかさを知る文学を学びこぬを晒すアーチン

青葉闇木木の息する水無月の香を届けたしウクライナの地に

藤田美智子　雲路

・新

牧雄彦　南の国へ

・大

青空と対峙の構へ　いつさいの葉を落としたる桜の大樹
凍て空を指す徒長枝の赤赤と　やんちやな子らがいとほしくなる
果たされぬままの約束思ふ夜を積みたる雪のかたまりてゆく
白木蓮の花ひらきたり秘めゐたる思ひ一気に吐き出すことく
ほろ酔ひに昔語りをする君の泣きぼくろにばかり今宵目がいく
不機嫌の理由を知りて何になるどしやぶりに路上の泥流れゆく
雲路とふわれには見えぬものを知る鳥の眼の澄みるるならむ

藤森巳行

曼殊沙華

・銀

秋彼岸近づくと咲く曼殊沙華不気味な花弁を怖れた昔
地獄でも淨土でも咲くか曼殊沙華業火の炎か仏の傘か
曼殊沙華咲くふる里の丘の上父母の眠れる墓がありたり
いいにほひ涼ひてくるベーカリージャンバルジャンを思ひ出したり
過ぎ去れば今年の暑さを忘れたり羊雲浮く空を見るる
ふる里を出てくるまでの冬支度薪わり炭焼き父を手伝ふ
田舎でも今は空調石油ストーブ懐かしいなあ炬燵の温もり

船田清子

金の光矢

・天

遠き日に見上げし深き秋空に迷ひたし今年　雨の九月。

彼岸季たがへずニヨッキリ茎伸ばしま赤き花傘開く一齊
秋彼岸山頂の墓地の続縁にし和して声あぐツクツクホーリ

魚ならぬ輕石までが列島の東岸を攻む黒潮に乗り
しつとりと草木と土の香をはらみ夜氣は満ちたり立春の宵

春雨は砂糖をこぼす音聞かせ桜の笛へささやきかくや
君や浴びし?雲なき天界に放たるるスーパー・ムーンの金の光矢

松瀬トヨ子　花酔いの蜂

・沖

パン生地をねかせるように歌の稿ふたび捏ねてポストへ送る
やんばるの山切り裂きて道となり豊かに寂しづがふるさとは
銀色の衣まといて鉄砲百合の筒より這い出る花酔いの蜂
どっしりと土に掘り出す薩摩芋ひげ爺もいて冬あたたかし
前田高地の傾り一面の墓園地もえ咲く彼岸花火薙の匂いす
ケア室に黙食の母餉さくさくとコロッケを食むコロナ三年目
麻痺のこる手にベン握り歌を書く寂しくあれど楽しみもあり

池に生ふる草群の茎撓ませて無数のつばめが夜を眠るなり
今年奥立ちし子つばめは早や親たちとはるか南の国へ発ちしか
池の面を飛び交ふつばめの姿なくとほくの木々に法師ゼミ鳴く
篠山の茅葺の家しづかにて時折むかしの空気が匂ふ
今ころは雪降りるむか篠山の低き家並みの灯り遠そく
余命宣告受けしあなたの作品集一字一句を目を凝らし編む
自が歌集『フウの木』を携へてあなたはとほくへ行つてしまひぬ

松浦禎子

障子の部屋

・羊

自決の朝三島が机上に残したるドナルド・キーンへの最後の書簡
「自らの行動はわかつて頂ける」信頼あつきキーンへの遺書
キーン氏の命名したる「魅死魔幽鬼夫」その通りでしたと遺書のはじめに
限りなき友情への感謝したたむる三島の最後「よし」と叫ぼう
三島の死ニユーヨークにありて知りし時黙のいかほどキーン一身
啄木伝スタンンドの灯りに書きすすむ障子の部屋のドナルド・キーン
日本国籍、養子縁組も間に合ひて下町の墓へ九十六歳

松 永 智 子 蛍

・風

三 好 聖 三

・オーフ

・伊

あかときの間をゆく影ひとりなりみてあるにつと消えしままなる
さめてきくしづかなる音はるかなりあかとき聞を踏む足の音
「飛翔」とはかなしきことば終の日のきみのことばのきれぎれのこゑ
さりながらさりながらを繰り返しつづくことばのあらず夜の間
白き壁白き天井その底ひ螢火目に追ふにんげんひとり
昇降機の音の絶えたり聞を踏む人らの後に人の声なく
音のなきあかとき間に青白くただひとつなる大き螢火

三 浦 好 博

台風の一撃

・銚

台風の一撃にして向日葵のドーバーラインは黄から茶色へ
伊豆沼を覆ひて蓮の咲く頃かコロナ禍に思ふ故郷の盆
伊豆沼が映れば大声に妻を呼ぶ白鳥に埋もる我のふるさと
死の際にあるひは聞かむるさとのコウコウと鳴く白鳥の声
鳴鈴と打鉦と悲しき御詠歌と父母見送りきふるさと遠し
ふるさとの夕べはやさしき「おばんす」通りすがりの人みな言ひき
咲き満ちる蓮の季来て水光る沼のみち行く父母の墓参に

宮 本 靖 彦

まだまだのエール

・凌

右手あげ前方確認双手もてハンドルを引く鉄路さはやか

裏六甲に山法師訪ねし日の遠く同行の友らみな世を離る

降りつづく七夕の朝配の女性の笑顔とおしやれなコート

空腹を告ぐる公園鶴群音も叫びたし頭の空白

歩む間に夕晴れは去り三日月のかかる昔が街今は故里

高々と黄金の城をひろげたるアメリカン楓野の慈父のこと

国道に沈む夕陽が吾を射すまだまたのエールくるるがさまに

ある日戦争がロシアより来て吾が心ざわわざわと騒立ちやまぬ
惜しみつつ春を送りて立夏来るに戰火は已まず国連無策
敵基地攻撃能力とは何ぞ戰争準備に④を使ふな今年の漢字
般若心經写経なす間も〈無〉になれず怒り湧き来ぬロシアの侵攻
援助とふ美美しき言葉連ねつ政府は未来に重き借財
人類の必要とせる物全て地球に在り地球こそ眞実バラダイスなりと
外出を控へしままに日は昏れぬ心ととのへ明日へ向かはむ

茂 木 賴

しだれ栗

・埼

今日ひと日喜怒哀樂の喜の日なり小春日和の低山に来て

三河なる真清田神社門前に阿仏尼の歌碑しばし佇む

山岳博物館エゾハルゼミのしきり鳴き砂礫の花壇に駒草の咲く

飾られし車衣のきもの碧梧桐の匂を染めぬきし紫裾濃

ネットにて見つけし尺八演奏の「鹿の遠音」を聴く秋夜かな

一枚の落葉が日差しの中に散る須臾の間影を地に落としつつ

いまは亡き弟と見たしだれ栗辰野の町の旅の懐かし

両脚器も浪艇士も画舫も言葉遊びに『遊辞典』繰る
駄菓子の臭いを暗に見せながら麻生久美子が瞬時を笑う

追憶は泥にまみれて現れる多くは蛇行曲折にして
内眼を閉ざして寸時しみ透る秋の音色に耳腔をひらく
ものすこき雷鳴ありて妻も吾も猫らも吃驚してさやぐ

自転車に溢れるほどの荷を置きて西日に暖を取るらし女男は
家もたぬふたりと見える川沿いの西日に暖を取ることく寄る

御 代 田 澄 江

バラダイス地球

・茨

もとむらしげと

新学習指導要領

・そ

山本孟

独り身

・大

教科書で実用文を教えよとつまらぬ改訂を文科省はせり

小説の載らぬ教科書を使うという理系の子らは寂しかりけり
李徵とは自分のことと感想に記す子あり『山月記』を終え

悪を為す人間の弱さを『羅生門』に初めて学びし高一の夏

実用はその場にて学び人間の眞実とは小説を読みて学び来しなり

正義とは愛とは人間の眞実とは小説を読みて学び来しなり
人知れぬ悩みをかかえ小説に救われ生きしわれの年代

山下雅子

卯月のさくら

・沖

養学登志子

ゲルニカ

・凌

緩急の流れを生きし九十二年誕辰の朝穎しさに充つ

ひかり經いはらりはらはら地に還る卯月のさくらに愁いはあらず
人並の身動き遠のく日々となり哀楽の思ひ深まりてゆく

ふと黙しし母の心根諾えり卒寿を超えたる今ならわかる

その声のおぼろ気なれど父母の言葉にひたるひとときぬくし
いつの間に九十年と思うなり動くともなく雲は流るる

卯月生まれのいのちと思うさくらばな花冷えの今日はなやき湛う

山野幸司

鶯

・沖

横田敏子

マスク

・福

時に鳴く鶯ああと妻の言う春は今年もおだやかに来る

水入れに田んぼを回る日常のわれの仕事に良き風よ吹け
群れをなしブール遊びの人々の滴は玉と輝き落ちる

稻刈り機時に止まれり草の中ゆっくり進む赤とんぼ見ゆ
雪の降る川面ゆっくり水鳥は漁りながら光をまたぐ

氣合入れ斧振りおろす一瞬に丸太すつきり二つとなれる
毎日の農の作業に追われいるわが退職は天驅ける馬

毎日の農の作業に追われいるわが退職は天驅ける馬

作り置き冷たくなった副食を三度温め食べる独り身
読み疲れ本に乘しガラス戸のうろこ雲見るいつまで生きるや
「防火用水」広辞苑より除かれる戦中を知る仲間も消えゆく
立ち昇る珈琲の香よ命日は君の好みの器にて飲む
初物のえんどうごはん湯気立つを妻に供えてわれもいたぐ
うたた寝の夢に現わる知らぬ町似し人に遇い声かけ目覚む
ウクライナの無惨な姿に引き続きテレビは映す日本の花見

さくらの前にどれほどいただろう張り裂ける声呻きいななき
「また来ました」とう表情のシュエットさんN響指揮する九十四歳
夜囁をきくよううに聴くブルームス指揮権持たずささやきのこと
夜の網戸に鳴くもののいるやすけさよ朝の露台に絶えて伏せいぬ
モティリアーニ戦禍の惨状見えぬよういとしきひとの瞳描かず
色鉛筆中の一本灰色が使ってほしいとぬきん出て言う
人間の問題なんだ核兵器』九十六歳坪井直さん逝く

吉永惟昭 君逝き給う

・熊

梅本武義 平和か日本

平和か日本

・羊

悔い残す女のことのみ浮かびくる予報は雨後・暴・後雨
コート黒・ボストン一つ 国境へ独りで来たと女達民
祖国捨つる思いはある日に返りゆく何も出来得ぬもどかしさのみ
祖国愛 死ぬことなりと見つけたりいみ言の葉わかる氣もする
卒然と君逝き給うくしゃくしゃに朝刊一面に訃報が奔る
与野党の裏も表も知り尽くし人懷つこさが君の持ち味
参議時は君北方領土委員長歴史探りつつ千島語りぬ

磯田ひさ子 丘

・森

八十歳の手習ひといふ大津絵の「將軍地蔵」の掛け軸届く
まんまるの目のあどけなさ胸に没むをさなが病むと遠く聞きしと
手のひらのやうに広げて天ぶらに路のたうに友の添書
葉牡丹の渦立ちあがり公園の縁に瘦せたるバゴダの並ぶ
コロナ解除に湧く浅草を鎮めつゝ寒のもどりの雨降りしきる
さんねんに思ふこと一つよき嫁と言はれて日日を無策に過ごし
誰よりも私が大事 古稀を過ぎ辿り着きたりみどりなす丘

市原やよひ

青空

・萬

聖火台の花開かせてトーチ持つ大坂なおみ今宵美し
あの時は秋の青空今聞くオリンピックは真夏の夜に
花桃は赤と白とに咲き分けて貞青き空のキャンバスの中
冷蔵庫の中に花咲く菜の花を花瓶に移す静かな雨の日
夫からの呼び出しチャイムに急ぎ行くベッドにやり「ただ押しただけ」
明日集う五人の為に飾り置くまだ色浅きあじさい一枝
母に似し姉の声聞くその先に広がりゆけるふるさとあれこれ

春空を音よりはるか先を行く銀翼見上ぐ平和か日本
戦争の正義は勝者が決めている加担をすれば勝たねばならず
ウクライナ映像に怒り湧く日々は娯楽番組見る氣起こらず
穀物も天然資源も豊富にてサタンも育つロシアの大地
黙りゆく香港の民黙らせる中華の恐怖日本にもじわり
香港もおもねり上手を競い合い習近平が笑顔を見せる
耕して天へと至る北鮮を思いつつ見る里の放棄田

大浪美雪 菊の香

・森

庭の辺の小菊のこぼす黄の花粉生きるといふは地を汚すこと
抱へたる枯菊にまだ残りたる菊の香りを胸深く聞く
霧深き季となりたり庭の辺の白菊はつか紅のさしそむ
ヒヨドリの音立て騒ぐ蔽陰の南天の実の残り少なし
噴水の秀先に乗りてヒヨドリは翼を展げ光散らせり
噴水の秀先をめざし木の上のヒヨドリは順に水を潛りぬ
朝早く時雨ゆきしか石塹に水の溜まりぬ今日は立冬

奥田陽子 四月

・羊

空青くふたりの娘らの笑みこぼれ繰うのみにありにしさくら
声勵ましわが決断を支えんと子の言いくれぬひと日の雨の夜
卯月いまだ戦いやまず隣国に戦車贈りし(モルダウ)の國
モスクワのデモに捕われし老いし女いたく小さしまだ甦りくる
怖がりのあの子に見せて良きものか空爆砲撃燃えあがる家
一齊に散りしは鳥か落葉に似て音もなく水に浮きいる
空を裂く声に行きたる鳥のこと空は貞冬の若を映す

小野雅子

芍薬

・羊

二年生より種うけ継ぎて校庭に一年生が植うる朝顔

手に持つたもの取り落とすごとくにも鉄棒はなれてしまひたる指
芸名にしたき美しき名前あり会つたことなき会員のなかに
「ケータイ」のなき頃の唄かなしみを若さを秘めて美しきかな
さういへば聞いたことあることばかり西人の歌集読みゆく
ゼロばかり並ぶ会計報告書 会議 催しなく過ぐる年
芍薬忌と姑は呼びたり畠にて供へたる花ほころびはじむ

神田鈴子

銀木犀

・大

仄かなる匂ひに夕べ振り向けば銀木犀の小花がのぞく
とつぶりと暮れて家路を辿りゆく夜空に月は欠けつありぬ
拭き上げし窓のガラスにふうわりと年の收めの風花が舞ふ
白鷺が冬の日を浴びすべく立つ暗緑色の流れの中に
ソメイヨシノの散りしく道に後追ひの八重桜咲く光降るなか
いつまでのケーキ作りかしみじみと心をこむる今のこのとき
叶はざりし夫との旅よ黒部ダムが今も吾を呼ぶ旅行券褪せず

菊地栄子

発芽のみどり

・鴎

門口に吹き入る雪の凍結を碎く鋼は空にひびけり
ラーメンを食べる座席に間隔あり涙ぐましもこの食堂も
新しきワールのズボンに今朝は行く冬毛にかわる獸のように
筒状の花びらの列乱すなきダリアに対す一目置きて
日々にさえずり来たり平屋なるひとり居まれに聴福のあり
咲いたとて向かいの丘のカタクリを日々に言うクラブの帰り
ベビーリーフ蒔きて六日目ひそひそとこの世を伺う発芽のみどり

北山雪男

あきらめ河に

・伊

沖縄に負債永々押し付けて戦後日本のバランスシート
辺野古なる海に捨つとや叔父の骨あるやもしれぬ土掘り返し
訊ねたき明日あり九月一日の書架より大杉栄呼び出し
晩年は枯れてはらりを願ひしがなほ生臭し此岸の風は
接点はほんの一、二の血族と不協和音の諱経聞きをり
おさらばと告げたきものを世の義理の爪先踏まれ立ち尽くしたり
出口なき現に馴れて幾年があきらめ河に自助の舟漕ぐ

木村文子

五月マラソン

・羊

星形の葉がむくむくと地を覆い万華鏡のごとく春来る
浴槽のゴム栓抜けば真ん中に空氣を立て湯水の柱
言葉より先に飛び出すものたちへ手を伸ばしつ幼稚歩む
歩道橋渡りゆくひとこんなにも遠くからでもあなたが見えるよ
大事と捉える心のうすべら背丈を超えた雪崩しゆく
まだ雪が解けきらないと札幌の五月マラソン中止となりぬ
さすらいて帰りしことく一枚の絵はがきは来る春の終わりに

草刈十郎

かたつむり

・世

遅延として歩みののろきかたつむり己を信じわれも急がず
蜘蛛の巣にかかりし不運黄金虫くもに抱かれ命果てたり
庭の隅小枝につかまる空蝉に命の気配のこりるなり
敗戦忌あの竹槍で戦ふと思ひてゐたる少年の日よ
敗戦日十五歳より民主主義七十七年めでたくもあり
露の世を嬉し哀しと生き来しが老いたるわれの余命いくばく
雀来て遊べる庭の蜘蛛の巣に雨の零のネットレスあり

國井節子

明石の海

・春

近藤栄昭

COVID-19

・虹

ああ五月明石の海はまぶしくてあわてて掛ける色付眼鏡
海峡に出入りの船の大小をみな受け入れて風のやさしさ
連休にふたつ遊びの妹の一家とひとときバラ園めぐる
お互ひに年は取れども時にするお国言葉のなつかしさかな
薬師寺と平山郁夫の結び付きガンダーラの絵の生き生き輝く
昼も夜もりズム正しく脈打てる親から受け心臓の音
たまに来て息子夫婦の助けありふとん干したり芝生を刈りたり

河野繁子 蛍の宿

・雁

娘の家族となりに住むをさせと外見にみえぬ淋しさのあり
草しげり水は見えねど川べりの螢の宿は今年も営業

落し文ひがな一日つくる虫窓へ无聊に雨の日過ごす
一を引き二を引き算ばかりなる心のひだに咲く山野草

さからいて椅子など逆さまに置く人に誰かと問えは「おこるくん」と
たましいの底に残せるやさしさに夜中にもらす「すまんのう」「
おこらずに仲良くしよう」と手を伸ぶに申し訳なく涙あふるる

小林能子 鈴の音を追ふ

・羊

へなへなと尻をつくさま見られいや土鈴のトラのまん丸の目に
コロナ禍は東北ユースオーケストラの公演うばひ三年目となる

奏でては励まさると郡山「お互いさまセント」にはじける笑顔
ゴルボールの決戦ラジオに耳を寄せ気迫と幽かの鈴の音を追ふ
テレビ塔に炎の映像 息をのむチエルノブリ事故の記憶に塗れて
キエフより元留学生が日本語で危機伝へくる 爆撃音も
日当たりは掌ほどの地境の大黄花カタバミ幸せさうに

白華せし壁のレンガひび深しワクチン打つをためらっている
マスクして危険をはらう仕草してコロナよけるができる限りか
赤錦が恐れの色と知る人がコロナに塗っておびやかしい
マスクする顔の近づく理髪店コロナ恐れる顔大接近
COVID-19にwithといって触れてゆくwithoutに耐えきれなくて
原発の黒い雲飛ベ海の果てコロナは帰れ太陽の縁へ
使い捨てが日常のマスク箱買いができた喜び感激はるか

近藤芳仙 坂岸会

・信

つかの間をマスクはづして安らげり我が奥つ城とならむこの場所
彼岸会のみ祖・亡き夫いまこころは何処の岸か風に吹かれむ

長月の黄菊・白菊その色のいまださびしく墓をいろいろ
吾のみが見る水の子の花立に菊の小さきをそつと押しあおく

納骨の八月六日は熱かりき墓石の下の夫に別れき
見送りて十六年の歳月のもう過ぎてをり 秋風に佇

見えざればみえざるままに尋めゆける長き道程けふをかさねて

坂上直美 君いまさねど

・天

春の雨いたくな降りそ止まざれば心もしのに君を恋おしむ

虹出でて薄れてやがて消えゆくを一人窓辺にじつと見ており
君あらばともに桜を愛すべきを夕暮れひとり散る眺むる

幾年の君なき夏を過ごすらん君に向かいて遠く眼をあぐ
雲となり君が御許に飛びゆかん空のはたてに迎え給えや
春の雲ぼよんぼよんと浮かびいて我に呼びかく「気楽に行こや」
君遣すセーター・ジャンバー借用しこ寒き冬を乗り切らんとす

坂出裕子 雀

・洛

コロナ禍の刻にはあれど雀五羽今日も砂浴びしてをり庭に
砂浴びをしたる雀の残したるくぼみに朝のひかり差しをり
ひたすらに籠るほかなし体温を超ゆる熱暑のコロナ禍の日を
いつ果つとも知れぬこのコロナ禍の日は戦争のあの頃に似て
コロナ禍の動かぬ時間とほき日の思ひ出ふとも胸をよぎりぬ
思ひ出の中に生きゐる人はみなやさしき面に笑みを浮かべて
人に会ふことの少なくなりし日の夕べ飛行機雲は伸びゆく

佐久間すゑ子

ひだまり

・鶯

ひい孫と話の合わぬひだまりよ君は良寛さまでいいのです
朝あさに君が真向かう師の写真書齋の中のしばしの逢いか
伎芸天にさしのべられしみ手のことき君の手を受け歩みを支う
親指とひとさしゆびに丸をつくり君は機娘の合図となせり
切り落し君の手の爪拾いあぐ過ぎた命と思いていとし
指を組みきつねの影絵で子と遊びし過かなる日を君の手に見る
虎の尾を踏んでもゆるしてくれそうなこのおだやかなひだまりの君

佐藤道子

旅

・甲

夫在さぬ旅はさみしも雲の下山の果てまで見ゆる青空
夫在さばひたすら車を走らする明日を過ごさむ町を見ひて
一緒には入れぬ温泉女風呂いま家族風呂ともに浸らむ

旅しても淋しさ募るばかりなり遠き昔の幸を思へり

海棠をこよなく愛で逝きし故春は淋しと妹の文

叔母の文見て涙ぐむ子の父は旅立ちてより二年となる

思ひ出の地へ旅するは何時ならむ今は淋しさ募るばかりで

篠原まり子

温もり

・羊

ロシアパン固き国境に生まれしは亡き父母と嘆き同じく
夢の中父母の声聴き分け雪にまみれた体が温い
婚礼に招かれ八十六歳は白いマスクとピンクの爪染
暮れ早き灯らぬ部屋にうとうと卵くらいの温もり抱き
咲き残る白きバジルの花摘みて食べてしまつた誕生日の今日
ウォーキング冬陽の温もり人を恋う「岸辺の旅」を一日下さい
師の言葉「悲しみは詠む」四十年越えて今「あるがまま／スマイル」

柴田登志恵

かなた

・天

朝明けに蝶のむくろの散らばれる桜通りを頭垂れゆく
クレーンは埠頭の端に伸びあがり海のかなたを見はるかす形
いつからか寛瓶がれし人なりぬひそやかに動く肩甲骨持つ
かなしみを曳きするやうにリュック下げ行かねばならぬところへゆきぬ
紅茶葉のひらくつかの間まなうらに雪晴れの山の無音ひろがる
かなしみをこの海へ捨て旅立てよ闇はばたく恋せむがため
路の上の埋葬さへも許されぬむくろへさくら降れ花衣

鈴木結志

色即是空

・福

さくら花識闇までも染めてかつ心理の中に花園を生む
「銀河九天より落つ」詩をたたず紫雲にけぶる龍ざくら花
表現は自力の花と筆執りて書の個性美をひと知れず生む
自我論の律義の中の言の葉に色即は空こころを正す
A-Iの緻密療法禁断の「動物乗り」に興味が走る
体验の倫理の章をうたに詠み老いの意氣地の力ひき出す
エリザベス女王と生れ同い年われはうた詠み日日いつくしむ

関根榮子 道

道

・埼

高津砂千子

おにぎり

・風

道代えて今日の幸せ満開の桜に小さき社と気づく
頑張りは駄目ですよと医師の言つ脳は出来た事を覚えていても
雨上がりの空気を吸えり人気なき道に入りてマスクをはずす
撮り鉄の人二・三入カーブする鉄路のほとりの野芥子の茂み
仲磨呂のはるけ想いいかばり行く野の空に月昇りくる
スフィンクスの謎かけの答えの人間と杖を突きつつ夫の言えり
探している星座みつからず隕石の何処へ落ちしや流星ひとつ

関根和美

触れる

・崎

日光の新そばいただきその店に崩れるごとくたおれたる母
娘の声とわかるか母のつぶりたるまぶたの動き面の明るむ
とうとつに別れは来んと許されてひととき母とふかく触れ合う
たたかいの表情とかれ顔やかな顔に触れゆくまだぬくみある
わたくしが先に逝くこと何よりも怖れる母はや憂うるな
小諸なる古城の園に咲きみちる共に見上げし終なるさくら
「お母さま幸せでしたね」「私こそ母と一緒に幸せでした」

高尾恭子

千の風

・大

探しものはイブのチケットりきされたダッフルコートのボケット冷えて
シユトーレンを薄く切る夜を重ねつ檣の鉛音ちかづいてくる
オルガンの音色スローに響きあう膝下小僧をかかえて聖夜
プレミアムシートのチケット空を舞う聖夜ふたりが風になるまで
飴色の風呂ふき大根ふうふうと湯気によく今年を仕舞う
うつし世はむすんでひらいて霜焼けに赤くただれた両手をかざす
留守電はときれときれの母のこえ雪が降ったよそれだけのこと

竹下妙子

過ぎゆき

・霧

小夜ふけて煙らふごとく浮かぶ川天の川とは寂しき川か
稻妻の光れる中に浮かびける「田の神さあ」のくれなるおべべ
捕らはれの身のこと蜘蛛は動かざりみづから張れる網の真なかに
散りやまぬ楓もみぢの危ふさは揃くられる文にあらずや
夕ぐれの童話のことき明るさに吾にかへりて来るもののがれ
「ただ今」と言へば「お船り」と言ふ昔の一人一役慣れて二十年
有りのまま生きたしと思ひ涙出づ風すさぶ夜をひとり覚めるて

「もう一度食べたいなの大好きおにぎり」友の最期のメールは消さず
眠られぬ夜は嘆かず歌を編むことはの海を浮きつ沈みつ
透きとおる小エビピンポン跳ねており思わず求む寒の店先
経験は財産なりき車イスの扱い馴れてはずむよ胸が
むらさきのアッシュセージの勢いにふれつゆけり通院の道
貼り替えし障子六枚びんと張りわたくしの部屋生き返りたり
かむりいしベールいつしかにりおち隠すものなきうつし身となる

滝田靖子

正義

・新

異動する三人退職する一人産休の二人定年の二人
真夜中を帰れば暗きテーブルに先に寝ますとふ母のメモあり

同居する母の気配のない夜中今日も静かなひとりの夕餉
真夜中のひとりの食事にも慣れて意図せぬ黙食かく味気なし
ため息は吐き出すものぞ呑みこんで膨れる腹をどうするつもり
振り上げた拳を宙に置き去りに流れ行くもの日常といふは
正義などただの旗印結局は多数派が勝つそれだけのこと

田 土 成 彦 UAP

・宙

虎 谷 信 子 幻 想

・伴

UFOはUAPと呼称変へどうやらほんとに飛んでるらしい
張り詰めた翼は風を抱くやうに天より降る一羽白鶴
空き瓶を溜めゆく三つ四つばかりかなしみつめるには小さくて
早春の土手の斜面に見つけたる土筆ひとつは摘まず帰り来
元興寺浮岡田にある進歌碑三度まみえぬ花散るものに
コンクリート大嫌ひだと叫びたる姫剣の声は聞こえないけど
現世なればペットボトルを提げるむ百濟観音のその細き指

田 土 才 惠 黒 豆

・宙

ささやかな農を楽しむ人となり黒枝豆を下げる息子の来る
ぶつくりと実の膨らめる黒豆に自信のひとつ伴いてくる
あの人名字が思い浮かばない一日とうに過ぎたる今も
早起きに勇めど早も数時間過ぎてしまえば元の木阿弥
手に余る夫の介護に明け暮れる友への便り書きあぐねつ
薬師寺に向かう乗り換え西大寺献花持たねど黙祷捧ぐ
みたり子を乗せて走れる電動の自転車令和の風切りゆける

玉 井 綾 子 踏み場

・羊

起きぬ子の羽毛布団にうすもれて固き足裏の指色ピンク
十歳の子に変声期 低音の聞きとりにくい祖母を置き去る
父母はそれぞれの部屋それぞれのテレビ音量と室温に住む
園庭のない保育園 園児らの踏み場増すこと花びら散れる
登校班に置いて行かれし班長の八重桜の下追いかける腕

原爆忌に授業のありて「今日」の意味今日学べしはコロナ禍の益
笑いつつ俳句を細断するテレビ見ていじめじゃんと子は判定す

水かけろふ 白壁に揺らぐ七日盆。井戸替へざわめく背戸ひろかりき
七日盆 つるべの軋る音つき 井を踏すしづき 朝の日に散る
十葉の白花満てる 背戸の辺に 波なみとまく 真水ゆだけき
風とほる板の間に座し 井戸まつる蘆の上なる 供物の色どり
白き紺似合ふ人あり 恋ひ初めて、盆の頃より 華やぐ家ぬち
灰色にわがるた。せくすあります ぱろぼると 烈しき戦の日々を経後
誰彼と 遊きにし人の手向けとも 井戸神まつる 思ひしみみに

久 我 田 鶴 子 永遠の明日

・羊

ときどきは覗きに来てよ死んでるかもしれないからね どこか真面目に
ひきかへしもいちど顔を見たることまたねと言ひて手を振りしこと
退院のすがた見しよりはらはらと目守りゆたるも十日に足らず
からくりの壁を反転あさやかな消えかたに泣く隙さへ与へず
寝台のひとりのサイズはみだして寝相の悪きご遺体なりき
明日のあさ目覚めるつもり死を知らず死を知らざれば永遠の明日
死斑あり こゑのやりとり簡潔に〈死〉が確定してゆきし扉の内

